

## 「我に来よと主はいま Jesus is tenderly calling you home」

～讃美歌からの黙想～

ファニー・クロスビー作詩 ジョージ・コール・ステビンズ作曲（1883年）

この讃美歌の背景には19世紀アメリカの社会情勢や福音運動、文化、様々なものが複雑に存在しています。それを書くにはまだまだ勉強と整理が必要ですので、今回のエッセイはアメリカ時間2月10日、日本時間2月11日に行われた「岡本牧師と共に味わう讃美の力」においての岡本牧師の素晴らしい説き明かしとメッセージから黙想を得た事、また周辺の事などを少し書かせていただこうと思います。

讃美歌「我に来よと主はいま」の作詞者であるファニー・クロスビーは1820年、ニューヨーク州ブリュースターで生まれ、生まれて間もない頃に視力を失いました。ファニーはずば抜けた記憶力に恵まれて、幼い頃から聖書を暗記できていたと言われていました。彼女の母親も祖母もまた、深い信仰を持ったクリスチャンでした。

そのような環境にいたファニーでしたが、彼女が真の信仰へと「回心」したのは、1849年11月であったといわれています。自分が本当に信仰者として全て主に向かっていくのかという深い苦悩の中から3日間続けた祈りの中で、「天の光が魂に満ちて」真の信仰に導かれていったという体験を彼女は自伝に書いています。

その導きに従ってファニーは、伝道活動と共に1864年以降は讃美歌作家となっていきます。彼女は盲学校の教師として、また様々なリバイバル運動で活躍していきました。

「我に来よと主はいま Jesus is calling you home」を作詩したのは1883年です。作曲者はジョージ・コール・ステビンズ（1846~1945）、ファニーと同じく伝道者ドワイト・ムーディー、音楽伝道者アイラ・サンキーなどが行っている伝道の集会などで「歌のリーダー」として働いていた仲間です。ファニーは彼に深い友情を持ち、「もし、高い名誉と教養を備える人がいたら、それはステビンズです。彼は私に人生の隅々までをその善良さで満たしてくれました。」と言っています。ファニーもまた、「暗闇の歌姫」として歌手として、詩人として伝道活動の中で大きな存在となっていました。讃美歌「我に来よと主はいま」の英文の歌詞には、何度も「calling」という言葉が使われています。そして「優しくイエスが呼びかける声を聞きなさい」と言っています。おそらく彼女が1849年11月の回心の祈りで経験した事からでしょう、「愛の陽光」から何故さまよい歩くのか」とも、その第1節には書かれています。

その歌詞に作曲されたステビンズのメロディーは軽やかな風のように人々の疲れた心を癒し、重荷を捨てて軽やかに主の愛に歩むように柔らかに流れ、「私に帰っておいで」という主の呼びかけの愛に満たされたメロディーです。

ここで、今は忘れられかけている1人の作曲家の事を書いておきたいと思います。ファニーやステビンスと同時代に生きたアメリカの作曲家の**スティーブン・コリンズ・フォスター（1826~1864）**です。

彼は「**アメリカ音楽の父**」と呼ばれ、37年の生涯に約200曲を書いています。1826年にペンシルベニア州ローレンスビル（ピッツバーグの近郊）でアイルランド系移民の家に生まれました。幼少の頃から音楽に興味を持ち、才能を現し、やがて作曲家を志します。正規の音楽教育を受けた事はありませんが、多くの楽器を弾きこなし、ベートーヴェンや、ウェーバーなどの音楽を夢中になって研究したと言われています。18歳の時には最初の歌曲集が出版されています。

後にシンシナティに移り住み、ゴールドラッシュの賛歌となった「**おおスザンナ**」を発表します。そして奴隷解放に心を動かされて**黒人霊歌**と、アイルランドにルーツを持つ**ヨーロッパ系の音楽**の混合のような、大衆的で親しみやすい、甘い雰囲気を持つ歌曲を次々に発表していきます。「**ケンタッキーの我が家**」「**主人は冷たい土の下に**」「**故郷の人々**」「**オールドブラックジョー**」などは今でも世界中の人々に愛唱されている大ヒットした曲です。

フォスターの歌曲にあるリフレインは、南北戦争直後に起こった前述の伝道者ドワイト・ムーディー、アイラ・サンキーなどによる伝道集会で歌われた**ゴスペル・ヒム**（福音唱歌と訳されている）と共通しています。

フォスターは1860年にニューヨークに移り住み、代表作の一つである「**オールドブラックジョー**」などを発表しましたが、音楽だけでは生活費を得ることが困難で、困窮生活が続いていました。

ファニー・クロスビーはその頃ニューヨークの盲学校で教師をしていましたが、フォスターの音楽に刺激を受けていて、同じ学校で音楽教師をしていた**ジョージ・フレデリック・ルート**（1820~1890）と組んで、1000曲以上の詩を書いています。（その中には讃美歌495番「**主イエスよ この身をゆかせたまえ**」が含まれています。）

フォスターの作品は19世紀のアメリカの讃美歌作曲家達に影響を与え、その作風は後にファニーと出会うことになる約20歳年下の**ジョージ・コール・ステビンス**の音楽にも受け継がれていると思えます。

その頃アメリカには職業作曲家はまだ存在していませんでした。そのため、フォスターはアメリカにおいて音楽で収入を得ようとした初めての作曲家となりました。ですがフォスターの生活は、歌曲のヒットにもかかわらず十分な収入を得る事ができずに、困窮を極めました。そして彼は極貧の中で1864年にマンハッタンのホテルの一室で無残な死をとげます。37歳の生涯でした。彼は歌曲の作詞家とも決裂していたといえますので、同じ時期にニューヨークに住んでいたフォスターとファニーが出会う事があったらと、想像をせずにはいられません。

悲惨な最期を遂げたフォスターですが、彼の生涯は忘れ去られても、彼の曲は現在に至るまで国を超えて愛され親しまれて、**ドヴォルザークやアイブズなどのクラシック作曲家**にも、

少なからず影響を与えています。

フォスターはある意味でアメリカ音楽の開拓者であり、捨て石となる人生を生きただのではないかと思われます。

「我に来よと主はいま」は「ウィンナーワルツのよう」という形容を岡本牧師がされていますが、まさにそんな風を感じられるほど軽やかに踊りだしたくなるような明るく、楽しい雰囲気を持っています。Yokoさんの讚美動画もまた、軽やかで明るく心に残るものです。ワルツのようなこの曲は、音楽の要素としては2021年12月24日のクリスマスキャンドルサービス、2022年1月の「生けるものすべて」のエッセイで触れた羊飼いの音楽「パストラーレ」（8分の6拍子で、順次進行の音型である事＝音と音が飛躍なく、なだらかに次の音に進む音型。ドレミ、レミファのように）の流れを汲んでいます。

ワルツは一説には中世の頃にチロルを起源にして踊られていた舞曲とされています。まだそれは定説ではありませんが、イタリアに近いチロルが起源だとすると、先述したイタリアのピッツェラーリ（天使のお告げによってキリストの誕生を知った羊飼いたちがベツレヘムを訪れたことにちなんで、クリスマスの時期に山岳地帯からローマにやって来て聖母子像に音楽の演奏を捧げる放浪羊飼いの音楽家）との接点はあったものと思われます。

ワルツの起源がチロルの田園の農民の踊りから生まれたものであるとすれば、大きな流れで括るとピッツェラーリ達が奏でたパストラーレと音楽の源泉は同じだと言えるでしょう。

ウィーン市の中央には広大な美しい市立公園があります。有名な「ワルツ王」ヨハンシュトラウスのヴァイオリンを演奏する像を始め音楽家たちの銅像があちこちに置かれ、広い敷地でベンチでゆったりと読書をする人、犬を連れて散歩する人、カメラを抱えた観光客・・・そしてパンデミック前の夏の夜にはそこの一角で野外レストランとウィンナーワルツの生演奏が行われて、仕事を終えた人々がゆっくりとくつろぎと楽しみの時を持っていました。少しおしゃれをして、踊りの上手下手ではなく、ほろ酔いの中で耳に馴染んだ音楽（勿論ウィーンですからそれはウィンナーワルツです）に乗ってステップを踏む・・・ちょっと癖になってしまうようなそこは非日常のエレガントな異空間です。音楽は不思議です。知らない者同士、例え異国の者同士であっても同じ音楽を聞くことで、微笑み合い、楽しさを共有できるのです。これもまた、神様からの人間への贈物ではないでしょうか。喜べ、生きよ、と。しかし今、優雅で誰でも楽しめるその時間はパンデミックの為に奪われています。ほんの少し前まで当たり前にあった様々な喜びが、今は避けるべきもの、負のものとなってしまいました。

そしてアメリカではゴスペル・ヒムが盛んに歌われ、ヨーロッパではワルツが大流行した19世紀もまた、現在と同様に世界が感染症に苦しめられた時代でした。

人類の歴史はパンデミックとの闘いの歴史であったというのはよく言われています。14世紀のペストの大流行、17、18世紀の天然痘、1812年のナポレオンのロシア遠征によって帰還した兵隊からは腸チフスがヨーロッパに持ち込まれていずれも人類の大量死をもたらされました。また、同じく19世紀にインドで発生したコレラがヨーロッパ、アフリカ、アジアへと広まり、世界流行を起こしました。日本でも1822年、清、沖縄、九州を経由して西日本に大きな被害をもたらしましたが、江戸までは入りませんでした。しかし1858年にはペリー来航と共に乗員からコレラは江戸に入り、歌川広重などを含む多くの死者を出しました。20世紀初頭には「スペイン風邪」のパンデミックが全世界に広がり多くの人の命を奪っています。

前述したファニー・クロスビーが深い苦悩に陥っていた1849年、それはニューヨークでコレラが大流行をして多数の死者を出した時です。その頃ファニーは1844年に出会ったジョージ・ルートと数多くの歌曲を世に送り出していましたが、フォスターと同様にその多くが、暗い世の中とは裏腹の柔らかで感傷的な内容、作風の世俗曲でした。様々な社会問題や戦争の不安、感染症と、それを消し去るような音楽が求められていたのだとも言えます。そうした日常の中でファニーは自分の信仰、自分の歩むべき道を模索して心の奥で苦しみもがいていたのだと思われます。

その同じ頃、ヨーロッパではワルツが大流行していました。ワルツは農民の間に起こり、時を経て大衆に広がり、更にハプスブルク王朝でも認めざるを得なくなると貴族の間にも流行します。クラシックの作曲家達もこぞってワルツを作曲するようになったことによって、農民の踊りの素朴さ、泥臭さは消えて、やがてランナー、シュトラウス親子、フェールバッハ親子などの作曲家によって、陽気でお洒落な「ウィナーワルツ」は市民たちのものとなっていきます。メロディーは繰り返しが多く、わかりやすく親しみやすいもので、ステップは単純で踊り易く、人々は熱狂しました。ナポレオン戦争の終結後の「ウィーン会議」によってヨーロッパ中に広まり、その後の「ウィーン体制」でのメッテルニヒの圧政、物質的な繁栄の影での戦争の不安と、蔓延するチフスやコレラの疫病…それらを忘れるように「ワルツの世紀」とも言われる程、ウィナーワルツは隆盛を誇ったのです。

現在の感染症予防の観点からは手を取り合い、体を密着させながら踊る事は何と無謀なことであるかと今に生きる私は思わざるを得ません。また、大人数で唱和するアメリカのゴスペル・ヒムも同様です。しかし世界が直面した禍や苦しみの中で、岡本牧師が説かれたエレミア書 50:6の「山から丘へと行き巡って休み場を忘れた迷った羊の群れ」は、歌い、踊りました。

フォスターの歌曲は優しく美しく、リバイバル伝道のゴスペルは熱唱され、ヨーロッパが崩壊に向かう状況の中でワルツは喜びや楽しみ、陶醉に満ちて踊られていました。

音楽に関わっている私はこれらが全て、苦悩の中で神を求める心の叫びである事を知っています。どんなに世俗の音楽に聞こえても、音楽そのものが神の賜物であるからです。そしてその向こうに神の **calling** が存在している事も。

**「Jesus is tenderly calling you home」**

今世界が現実体験している未曾有のパンデミック…19世紀にあった事と何が違うのでしょうか。人間の知恵がいかに浅はかで頼りないものかを実感する中で、神様の「calling」と、ファニーの体験した「愛の陽光」を思っ、ファニーに示された主の光と喜びを思、このエッセイを閉じたいと思います。

T.N.